異世界での平凡な小話集。。

かりんとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界での平凡な小話集。。

【Ｎコード】
Ｎ１９８０Ｎ

【作者名】
かりんとう

【あらすじ】
平凡な日々を愛した人への登場人物（中には話の隅っこに出るかで無いかの人もいます）たちの、日常の小話を載せています。本編の隅っこで、こぼれていた日常の日々や思いの数々です。
本編を読んだほうが、人物が分かりやすいですが、読まなくても大丈夫かと思います。

異世界でのこぼれ話？（前書き）

遂に始めてしまいました。
お時間があればよろしくお願いします。
本編と平行しつつ、ぼちぼち書いていこうと思います。

異世界でのこぼれ話？

眠っていたはずのベッドの中から、血みどろの世界に来て3日目。

緑に囲まれた野営地は、一見するとキャンプ地にいると錯覚してしまいそうになる。

もちろん、戦装束の騎士や、腰に下げられている剣、何より観光地でしか見ない馬車を見るとここは違う世界なのだということを認識させられる。

だがそれ以外では、あまりにもふたつの世界は似通っていた。

森の木々も、その間を飛んでいる鳥たちも、

地球で見たのと変わらない姿をしている。

寸分無く違うかといわれれば自信が無い。

以前はごく当たり前に周囲に存在していたものたちで、深く観察したことは無かったから。

もちろん、端々まで眼を向ければ違いは多岐にわたってあった。
奥深く、人の立ち入らないジャングルのようなところには、虫だけでなく、鳥や、果てはウサギのような小動物でさえも溶かして養分にしてしまう植物が。
ムカデのように無数の足を持ち、色彩も似通っていながら、大きさだけが鼬(いたち)のように巨大なもの。
蚊の様でいて、なぜか天幕の布まで溶液で溶かし歳若い者の生き血しか吸わない虫。
手乗りサルのような姿なのに、その背にはこうもりのような翼があり、伝書鳩と同じく、伝令ができるもの。
カバのように巨大なのに、全身・尻尾はふさふさで、しかも2本あり、性格は犬みたいな
動物も・・・・。

だがそんなことは知るはずも無い。
そんな奥地には今のところ全く用がないし、進行上、出てきてこられても迷惑だからだ。

だから、今日もエミは何も知らない。
フェミニストな騎士たちが、見えないところでエミが来てから身だしなみに気をつけ始めたことも、殿下が毎晩寝顔を見ている事だっ

て、

もちろん知らない。

そうやって異世界での日々は過ぎていく。

ある男の独白（前書き）

隊の中の一人の独白です。

ある男の独白

戦場からの負傷兵を伴っての帰還という殺伐とした任務の途中・・・。

無数の死体が転がる中、一本の樹の根元にあいつは寝かされていた。

家族思いのそいつは、俺より４つ年下で、今回が初陣だった。

親同士が仲がよく、幼いころから良く遊んでいたように思う。
物心付いたときには、うちのおてんばな妹と共に、俺のあとを付いて回っていたから。
小さなころ、あいつは些細なことにビービーとなき、道端の野良猫を見てはかわいそうだと泣き、うちのじゃじゃ馬の怪我を見ては青くなる、そんな奴だった。
俺は何度となく、こいつは性別を間違えて生まれてきたに違いないと思っていた。
手足は細く、色も白い。
８つにもなるのに、一つ下のサラ（うちの妹）よりも背が頭半分ほ

ど低かった。
ひととの折衝を怖がり、いつもひとに譲っていた。
まあ、それに関しては気性の激しすぎるサラから、日常的におやつやその他もろもろを奪われていたせいもあるかもしれない。
初めこそ、おれもサラを怒鳴り揚げていたが、それが日常になると、声を張り上げるのも疲れるのだ。

あいつは俺が怒鳴るのも、サラがわめき散らすのも、一歩引いたところでこわごわみていたと思う。

それが変わったのはいつからだっただろうか。

あいつが9つになる夏に妹が生まれてからかもしれない。
リーリュシアと名づけられたその娘(こ)は俺からみてまさに『妹』という感じそのものな女の子だった。
あいつに似て（？）色白で、眼が大きく、茶褐色の髪に、少しくすんだ緑の眼。
生まれたときはまさに暑さの盛りで、あいつの母親はつわりも重なり、かなり儚い佇まいになってしまっていた。
療養のため、出産までと、その後の半年を避暑地で過ごし母親がガラサム（街の名前）に戻ってきたときには、腕の中にはふっくらとした女の子を抱えていた。

あいつは約一年もの間、よく耐えていた。
まだ9つ。
母親の恋しい年頃だった。

俺たちみたいな下級でも、貴族の子供は幼い時分から多くの習い事を始める。

男であれば剣に語学に、歴史。
女であれば、行儀作法にダンス、編み物に花もか？
まあ、母親について一年も習い事をさぼれるほど暇じゃない、ということだ。

歳の離れた兄貴が一人と、小うるさい妹、円満といえば聞こえがいいが、家族を溺愛しすぎている両親と、慣れ親しんだ使用人や気の置ける友達に囲まれた俺とは違って、あいつは一年間一人だった。
人見知りというか、遠慮がちで友達が少なく、あの時は親しいといえば俺と妹だけだったから。

あいつの親父はよく言えば実直、仕事熱心。
悪く言えば仕事中毒の堅物だ。
大人の事情をまだ子供だった俺が全て理解できていたとは思わないし、今も正直言うと全部は理解できていないと思う。
だが、それでも。
それでももう少し子供のそばにいて欲しかった。
心細さを隠して頑張る息子に、優しい言葉の一つもかけて欲しかった。
おばさんは、『不器用で素直に自分の気持ちを表現できない人なの』とか言ってたけど、限界があるだろ。

しかしそんなぎこちない関係も、真新しい敷布にくるまれた妹の存在と共に変わった。
おじさんは家に帰ってくるようになり、隣の家には灯りが灯るようになった。
そしてどうしても長く家を空けがちな父親に代わり、あいつは強くなった。

繊細で、優しかったあいつは大事なものを守るために、必死に頑張った。

俺は１６の歳に騎士団へ入団し、その後５年間自分のことに必死で家に帰れない日々が続いた。

今年の春、騎士団であいつを見たとき、一瞬見間違えかと眼を疑った。
５年ぶりの低くなった声に、芯のある口調に、耳をかっぽじった。

妹からちょくちょく話は聞いていた。
だがこんなに変わったのだとは思ってみなかった。

繊細さばかりが目立った少年は、優しさの残る笑顔が印象的ないい青年になろうとしていた。

そしてそんなあいつに妹は惚れていた。
天邪鬼な妹はいまだにそれを告白できていないくせに、周囲の女性関係に猛烈に嫉妬していたっけ。
笑える話だ。
ちっちゃくて、俺のあとを付いてくるばかりだったあいつらが、こんなに大きくなっていたなんて。

まあ、直接的な協力はしないが、遠くから応援はしてやるよ。

だが、戦争という一介の騎士にはどうしようも出来ないことそいつは浚われた。

初陣で行方が分からなくなった。

敵味方が入り混じった、すさまじい混戦だったらしい。
俺は別働隊にいて、あとから知った。
妹は、サラは目が潰れるほど泣いていた。
その後、国が建前として立てた負傷兵の奪還部隊に俺は一もにも無く名乗りを挙げた。

泣き暮らす妹なんて見たくなかったし、何よりあいつを連れ戻してやりたかった。
生きているならなおのこと。
死んでいるなら、忍びなく。
殺伐とした戦場に、優しいあいつを長居させたくなかった。

諦め9割、もしかしたら・・・が0．2割か。
ほとんど無理だろうとは思っていたが、それが俺のしてやれる最後じゃないかと思ったんだ。

だが、あいつは生きていた。
惨たらしい死体ばかり転がる戦場で、木の根元で眠っていた。
あちこち怪我をしていたけれど、命に別状は無く、5日後には自分で歩いていた。

最初にその姿を見たとき、この世に神はいるんだと思った。
この国で広がるセサム神教の神じゃなく、いつも見守ってくれる優しい神が。

ああ、結局のところ、神は人間だった。
それも黒髪の異邦人。
何も知らない部隊の一人に、勘違いで射掛けられたその女性(ひと)が、あいつを助けてくれていた。
男所帯の中一人で奮闘する彼女に、俺は感謝の意味を込めて手を差し伸べる。
殿下や、フォルさんの目が光っていて、その全てがあらわせないのは残念だが。

声をかけ、手を出すと、わずかにはにかみ、ありがとうございますと言う。

それはこちらの台詞だ。

ありがとう。あいつを助けてくれて。

後日談だが、彼女の存在によって、妹は大変やきもきさせられることになる。
だがそれはもう少し先の話。
恋だの愛だの言える平凡な日々の話。

ある男の独白（後書き）

誰のことを言ってるかわかりましたか？

名前だけの人にも彼らの人生があるということで。

サザヴィ・モントラの話（前書き）

前回に引き続き、隊の中の一人の話です。

サザヴィ・モントラの話

サザヴィ・モントラ。２７歳。
男。
ちなみに独身。

１３歳で騎士団に入隊し、１７で騎士を叙任された。
王都ではそこそこ大きな商人の次男だったが、次男では家督は継げないし、兄貴の補助となるのも悔しくて、反抗期ついでに家を飛び出した。
恥ずかしい話だがあの頃の俺は青かった。
近所のガキ大将ごときで強さに自信を持っていた。
まあ、入隊後すぐにその伸びきった鼻はへし折られることになったけれど。

騎士団はぶっちゃけ二通りに別れている。
親の一存で取り合えずいるプライドだけ高いお坊ちゃまと、
プロ意識を持って自分を切磋琢磨している奴とに。

俺の入隊目的ははっきり言って『なんとなく』だ。
さっきも言ったけど、親への反発が一番強かったかもしれない。
兄貴ほど期待されずに見守られるだけだった自分の境遇に対しての。
兄貴は兄貴で言い分があっただろう。
それこそ小さな頃から将来のためにと、習い事の数々。
俺のように近所のガキと転げまわる時間さえなかった。

そこで、上手いこと息抜きに娼館に繰り出すとか何とかできたらよかったんだろうけど、兄貴はくそ真面目で、なおかつ自分に期待されるものを判りすぎるくらいに理解していたから。
ストイック・・・ってやつ。
自分の進む道に対して一心不乱に、また明言実行な姿は・・・はっきり言って格好良かった。
兄貴言ったことは無いけどな。（恥ずかし過ぎるし）

俺はといえば、自由だった。
何をしても怒られず、ニコニコと見守られる。
まあ、道を踏み外し切れなかった俺のせいもあるかもしれないが。
（だって、自分の正義は捨てられないだろ。）

そんなこんなで放任主義とも取れる育ち方だった。
はっきり言えば、寂しかったのだと思う。
俺だって期待されたかったし、期待に応えたかった。

だが、親の期待は全て兄貴のもので、俺のものじゃなかった。

甘えるなって言われるのかもしれない。

何一つ不自由などしたことは無く、ある程度だったが好き放題やらせてもらえたから。

だけど、そんなの俺は望んでいなかったんだよ。

入団後、上下関係や訓練の厳しさに何度か逃げたいと思ったことがある。

何で、こんなとこに来たんだろうと後悔もした。
（・・・一度だけ逃げ出したこともある）
だけど、ここでは俺は必要とされてた。
俺の付いていた騎士は厳しくて有名なおっさん（今はもういない）だった。
口では『役立たず』だの、『やめて家に帰れ』だの散々言われてたが、影で他の騎士に『あいつは決して諦めない根性のある奴だ。見込みがある。俺が立派な騎士にしてみせる』って言ってくれていたの俺は知ってるんだぜ。
あまりのしごきの酷さに、尻尾巻いて逃げだそうとして、馬屋向かってた時偶然聞いたんだけどな。

――――――――涙が出たよ。
自分が期待されてること、認めてもらっていることに。
しっかり俺のことを見てもらえることに。
嬉しかった。

この日から、俺は訓練が楽しくてしょうがなかった。
やればやるだけ強くなれる。
もちろん急に強くなるわけじゃない、一つ一つ積み重ねた結果だ。
だが真摯に向き合ってもらえる、鍛えてもらえる、期待され、それに応えることが出来る。
これほど俺の望んでいたことは他に無かった。
幸い騎士の素質はあったらしいし。

おっさんは俺が１９のときに死んだ。

国境の小競り合いに派遣されていたときだった。

俺の親は今も元気にやってる。
だけど、おっさん・・・いやゲディアントは俺にとって親に等しい存在だった。
その頃もう騎士だったけど、訃報を聞いて馬小屋で泣いた。
いつ以来だろう。
もう何年も泣くことなんて無かったのに。
不穏な空気漂うこの国で、人が死ぬなんて珍しくないのに。
もう、子供じゃないのに・・・・

おっさんには妻と、娘（エアリーデ）がいた。
娘は俺より三つしたの２４歳。
おっさんに良く似た豪快というか、さっぱりとした性格の、ここもちしっかりとした体格（ごついなんていうと殺される）の子だ。
おっさんの訃報後、遺品を届けに行ったときはじめて顔を見て、話をした。
今まで、さんざっぱら自慢話を聞いていた俺は『話しと違うじゃねえか』と思わないでもなかったが、話せば話すほどその印象を変えた。
おっさんの言うとおり、いい娘だった。
訃報にくず折れる母を支え、前を向く芯の通った奴だった。

出会ってから１ヶ月後に交際を申し込み、今度の俺の出征が終わったら結婚を申し込もうと思っている。

大事な人のために戦い、大事な人が待つところへ帰る。

それってすごい幸せじゃねえ？

９割がたは上手く行くと自信を持っているしな。

だから、俺が妙齢の女性に服をひん剥かれて逃げ惑ったなんてことは一生の秘密だ。

あちらさんは引きつって拒否する俺に不思議そうな顔を浮かべていたが、家族でもない女が男の身体を見るなんて、娼婦でもない限り無いんだよ。

たとえ怪我人でもな。

（結局彼女はフォルさんに俺らを抑えさせ、身体拭きを強行した強者（つわもの）だった）

確かに、拭いてもらったあとはすっきりしたけれど。

今俺は、行軍、帰還の途中だ。

王都まではまだ遠いし、馬鹿な敵の多い殿下のこと、何も無く無事にとはいかないだろう。

だが絶対に君の元に帰りつくから。

結婚を申し込むため跪くから。

待っていてくれ。

後日・・・。

彼は知る良しも無い。
怪我の治療中に乗り込んできた彼女から『あなたには私が必要よ！！』と、他の騎士の前でプロポーズされてしまうことを。
そして、その後の生涯を尻に引かれて過ごすことを。

それは暗い戦争の片隅で起こる、平凡で幸せな生涯の話。

サザヴィ・モントラの話（後書き）

お気に入り登録、評価ありがとうございました。
とても嬉しかったです。

今後も、読んでいただけるよう精進したいと思います。

かりんとう

たった一話の男の生涯。（前書き）

一瞬の邂逅だった彼に捧ぐ。

たった一話の男の生涯。

俺の腐った人生、どうせろくな最後を迎えやしねえと思っていた。

事実、ろくな最後じゃなかったが

最後に見たものはまあまあだったんじゃねえかなと思っている。

俺の親はいわゆる娼婦というやつで、親父は何処のやつかも知れねえ男だった。

場末の娼婦が客を選べるわけもねえ。

お袋にも親父が誰かなんて検討もつかなかったんじゃないかな。

そんなガキなんて始末しちまえば良かったのに、何を考えたんだか、お袋は俺を生んだ。

お袋は周りの姉さんたちから言わせれば、少しオツムの足りない女だったらしい。

物静かで、笑うか、静かに泣くかのどっちかだったと聞いている。
ガキをこさえたからといって休めるはずもねえ。
子育てと、娼婦の両立なんて無理なことを続けたおふくろは、俺が４つになるかならねえか位に、早々と身体を壊して、あっという間に逝っちまった。

一介の娼婦が、それも場末の娼婦が、病気になったからといって医者に見せる金なんかあるわきゃねえし、見てくれる医者もいねえ。
世の中ってのは弱いモンから死ぬようにに出来てんだよ。

後はいうまでもねえだろ。

想像通りの転落人生さ。

まあ、一度は上を夢見たこともあったが、夢は夢だった。
蛆虫は所詮蛆虫。
蝶にはなれねえのよ。

好いた女も居たが、まともな環境じゃねえ。
いつの間にか姿を消していた。
それを恨むこともねえし、追う事もねえ。
諦めることには慣れている。

そうやってその日暮らしをしてたある日、やばそうな仕事を持ち込んだやつが居た。
ゲインなんて名乗っていたがどうせ偽名だろう。
こんなところに来るやつが、まともに名乗るはずもねえ。

やばい仕事だっつーのはすぐにわかった。
だが、一つ返事で受けた。
惜しむ命でもねえし、何より報酬が良かったんだ。
成功したらもっけもの。

その日のうちに、山賊風に偽装し、馬を駆り、山を目指した。
俺達はみんなそこが初対面のごろつきの集まり。
だが中に4人ほど、違うやつが居た。
そう繕っても、上品さは抜けねえし、生来の野蛮さは表現できるはずも無い。
まあ、御貴族様独特の俺らを汚いものでも見るかのような見下しようだった。
反吐がでるぜ。
ただ、貴族に生まれただけで何が偉いんだ。
お高く留まってんじゃねえっての。

俺以外に気づくやつも居なかったんだろう。
俺も報酬さえもらえるなら、後でぶん殴れば良いかと、見逃した。

結局のところ、思ったとおりのやばい仕事で、勝てる見込みどころか、相手の力をそぐだけの捨て駒だったんだろう俺達は。
やたら滅多ら鍛えられた騎士たちに、束になろうともたかがごろつきの俺達は相手にならなかった。
土砂降りの雨の中、暗闇で、馬鹿みてえに松明を持った俺達は相手から丸見えだっただろう。

数じゃあ勝っていたのに、結局のところ誰一人倒すことは出来なかった。
次々とやられていく中、俺の剣も遂に折れちまいやがんの。
己の不利を悟った俺は一目散に尻尾巻いて逃げることにした。
義理も何もねえ。御貴族様達はとっくの昔に姿を消していた。

脇に見えた繁みに向って、必死こいて逃げる。
折れた剣だけだが、逃げるだけならこれでよかった。

だが、やっぱり世の中って言うのは弱いモンから死んでいくように出来てんだろうな。
あっという間に追いつかれて、俺の首は高く飛んだ。
一瞬の出来事で、痛みを感じなかったのが幸いかな。

俺が最後に見たのは、驚いたような女の顔。
最後に抱いてもらったのもその女の膝。

何でそこに居たんだか分からねえが、無事で居てくれたら良いと思うよ。

くだらねえ人生、良いことなんて数えるほどだった俺の最後。

誰かに抱いてもらえたなんて、ぬくもりの中で一人じゃなかったなんて。

結構良い人生の終わり方だったんじゃねえの？

名も知らないお嬢さん、ありがとな。

最後に神様。

もし居るのなら、次はもっとまともな人間になれますように。

お袋の支えになれますように。

くそったれな人生にさようならだ。

たった一話の男の生涯。（後書き）

幕間や、行間で亡くなった人が居て、そういうものを書いている自分がいやになるんですが、どうしても必要だったので。

せめて、彼の生涯の話を。

１７の秋（前書き）

今の所、初の主要人物の小話です。

17の秋

あの時。

もう駄目かと思ったあの時

耳に聞こえてきたのは今にも泣きそうな女性の声

『死なないで

大丈夫だから頑張って』・・・・・と

必死に叫ぶ悲痛な声

それを聞いて思った

泣かないで・・・・と

敵か味方か誰かもしれない声だけのその人を、守りたいと思った

＊＊＊

夏の盛りを終え、夜には肌寒さを感じるようになっていた１７の秋、俺は初陣を迎えた。

ここ何年か隣国との緊迫した関係が続いていた我が国は、何度か国境での小競り合いを繰り返した後、一人の騎士の死をきっかけに開戦を宣言した。

それは俺がまだ軍にも入隊していなかった頃。
長年の家族とのわだかまりが徐々に溶け出した頃だった。

幼い頃、仕事で家を空けることの多い父との関係は長い間微妙なものだった。
良い父だったのだとは思う。
たまに返ってきたときは母を労わり、息子の成長を観察していた。
口数の多い父ではなかったから、何か出来たといって誉められた記憶は無い。
その代わり、母は『お父様が誉めていらした』と伝えたり、以下に父が愛情深く、尊敬できる人なのかを日々俺に言っていたように思う。

だが身近にいない、近寄りがたい父親のことなど理解できるはずも無かった。

その距離が少しずつ近づくきっかけとなったのは母の妊娠だった。
つわりの酷かった母は、出産前後の約一年の間、静養と称して街を離れ、俺は一人誰も居ない屋敷に残された。もちろん、実際に一人だったわけじゃない。
使用人がいた。
だが、隣の家と違って、厳格な父の元に管理された使用人たちは、その枠を超えることなく、９つの子供には疎外感と、寂しさだけが植え付けられた。

そんな中で唯一の逃げ場となったのが、隣家の兄妹、カーシェン・ベル・マクラージ（当時１３歳）と、サラ・ベル・マクラージ（当時８歳）の二人。

カーシェンは近所のガキ大将といっても良いくらい、兄弟の居ない俺にとって憧れの存在だった。年下とそれ以前に女とも思えない横暴さで、人をこき使うサラからよく助けてもらったっけ。

（騎士となった今では、絶対に人に知られたくない秘密だ）

何を思ってか、サラはことあるごとに嫌がらせをしてきて、小さな頃は泣かされることもしばしば。

芋虫の詰まった弁当箱をくれたり、人のおやつをことごとく横取りするかと思ったら、食べかけのものをヒトの皿に寄越してみたり・・・・正直された嫌がらせの数々を列挙したらきりが無いほどだ。

そういえば。

誕生日におばあさまからいただいた、黄緑石の付いたカメオも、取り上げられたことがあった。

その後なぜかサラの肖像画と、桃蜜石が埋め込まれた、元の形が思い出せないほど改造されたペンダントトップとして俺の元に戻ってきたが、不気味すぎて見たくないものを入れる箱の中に入れた。

ペンダントとしても、俺をおびえさせる気かと、正気を疑ったな・・・・。

その上、いつの間にか黄緑石はサラのペンダントとなって蘇っていて・・・・理不尽すぎるなホント。

今は、一丁前に淑女の仮面を被っているサラだがどこか苦手意識は否めない。

カーシェンといえばその後入隊を果たし、滅多に家に帰ってくることは無くなった。
自分も同じ道をたどった今だから、入隊後いかに自分のことで精一杯で、家に帰って来れない事も分かる。
けれど、あのときは見捨てられた寂しさで一杯になった記憶がある。
まあ、何処までも甘えていたのかもしれない。
カーシェンは俺にとって、母親以外で唯一弱みを見せられるヒトだったから。

なんだか、ここまでだけを見ると、随分弱っちくて、貧弱なもやしっ子を想像されそう（笑）だが、俺だって男だ。
守るべき者を見つけて、変わったんだよ？
それは母と、生まれてきたリーリュシアだ。愛すべき我が家の女性たち。
そして変わったのは俺だけじゃなかった。
父もリーリュシアの誕生から変わった・・・少なくても俺はそう感じた。

母は『あなたのときもこうだったのよ』と微笑むが、信じることは難しい。
あれだけ、仕事仕事だったのに、無理をしてでも休みをもぎ取ってくるようになり、傍目から見ずとも親ばか一直線な姿だ。
――――――微笑ましい、家族の姿だ。

それから父は、いかに女性が守られるべき存在か、男が家族を守るための存在かを俺に教え始めた。
俺だって、いつまでも子供じゃいられない。
父の教えどうり・・・って言うのがちょっと悔しいけど、自分を鍛え始めたんだ。

その後無事に入隊を果たし、１７の春、騎士に叙任された。
その頃国は戦争真っ只中で、俺が入隊・叙任後の家族の不安は言うに及ばないだろう。

だけど、家族を守るため、大切なひとのために戦うことに、戦えることに俺は誇りを持っていこうと思った。他の大多数の騎士もそうだし、本来男ってのはそういう風にあるべき者なんだから。

そして、運命の秋。

想像以上の激戦に、俺は己の未熟と、戦争の悲惨さを痛感することになった。
一度はもう駄目だと思い、全てを諦めた。
やるだけのことはやったし、俺が死んでも、父が家族を守ってくれる。
そんな信頼がいつの間にか生まれてたんだろうな。

押しつぶされそうな瓦礫の重みの中、そっと眼を閉じた。
見たい景色なんかそこには無かったから。
累々と広がる屍の海。
無念にも息絶えたものたちの墓場。

死の臭いが立ち込める中、まぶたを閉じれば家族の顔が浮かんできたから。

だが、運命は俺を見放しはして居なかった。

朦朧とした受け答えの後、しばらくして俺は温かなぬくもりに包まれていて。
このとき、しっかりと眼を開け、現状を認識できたらよかった・・・
と後々後悔することになる。

家族以外ではじめて守りたいと思った女性に。
俺の命を救ってくれた女性に。

生涯消えない傷を残すことになったからだ。
俺がしっかりしていたら、彼女一人で水を汲みになど行かせなかっただろう。
不安と恐怖の中、心細い思いをさせずに済んだだろう。

何を言っても後の祭り。
後悔先に立たず。

彼女は敵兵と誤認され、左肩に矢傷を負った。
気を失う最後まで俺のことを気遣いながら・・・。

情けないことに俺が全てを知ったのは、隊が天幕を構える場所についてからだった。
何年ぶりの再会だろう・・・カーシェンに全てを聞いた。
カーシェンは混乱し、喚く俺に
「彼女を守りたいと思うなら、後悔したらのなら、これから現せば良い。守れば良い。お前は生きているんだから、時間はいくらでもある」

と頬を張った。
やっぱり昔のまま。俺の憧れの存在。
眼を覚まさせてくれてありがとう、カーシェン。

エミにはその後すぐに会えた。
自分の傷をものともせず・・・というか省みず、ひたすらに怪我人の世話をしている彼女を見て、俺は自分が情けなくなったよ。
負けられないと思ったし、そんな彼女を眩しく思った。

この気持ちが何なのか、まだ分からない。

ただ、彼女を見ていると切なくなるし、守りたいと思う。

これから続く帰還までの道程、せめて彼女の支えであれる様に、切にねがう。

セディ

オン・ウル・サヴォア

予断だが。。。

初恋もまだらしいセディオンは、周りから見たらばればれのその気持ちの名を知るのに、随分かかっていた。正直、幼い頃そういう意味で遊ばせときゃよかったと思ったよ。
でもまあ、誠実に、まっすぐにヒトを思うからこそ、セディオンらしいとも思ったけどな。

つーか、実際のところ、セディオンより年上の彼女の態度は、弟を見るそれで、ちょっとばかしあいつがかわいそうになった。

妹の幸せも大事だが、弟の幸せも大事なんでね。

俺はいつだって見守ってるぜ。
一足先に幸せな家庭を築いてからな！

平凡な幸せを願うカーシェンより。

１７の秋（後書き）

なんだか、人物紹介のような様相を呈してきましたが・・・

いかがだったでしょうか。

楽しんでいただけたら幸いです。

また、主人公の話については、本編中に閑話としてあげていきたいと思っています。

こちらは、あくまで『異世界の小話集』ですので。

あしからず。

かりんとう

どこかの生物学者による解説（前書き）

本編次話にほんの一瞬ほど関連します

どこかの生物学者による解説

カナルディオンの山中には、様々な生物がおり、その生態は多様性、独創性に富んでいる。

今日はその中でも、一般市民の間で、広く親しまれているヤグーについて紹介しよう。

生物学名は『ヤグー』

これは、発見者のヤグディル・オスレーの名前からつけられている。

成体でおよそ、5キロほどの大きさになるこの生物は、山中に多く生息していて、それぞれが単体で生活を営んでいる。

繁殖期になると集団を形成することもあるが、それ以外はのんびり悠々自適生活といっても良い。

険しい山々を好んで生息するため、天敵が少なく、そのため気性も穏やかだ。また数も多いことから、比較的捕獲がしやすいだろう。

ヤグーの見た目についての説明に移る。

まず全体的に鶏を想像して見よう。

次に、鶏の胴体部分を魚の鱗で覆う。

足は短く太く、筋肉に富んでいて、その脚力は岩を飛び移る際に発

揮される。
見た目はアヒルの足のようにも見えるが、その違いは大きい。
足先には鋭い爪が付いていて、捕獲時に触れると、怪我を追うこともあり、けっして油断は禁物だ。

頭はまさに鶏の頭部を4倍ほど大きくし、なおかつ鶏冠の変わりに、尾までモヒカンのように羽が揺れている。とくに頭頂部の羽の見事さは有名だ。黄色、橙、赤の三色が繁殖期には色鮮やかに主張される。

緩やかなカーブを描いた背の先、尾っぽは太く長く、イグアナのよう。
ただ、トカゲのように尾っぽきりをするところが違う点だ。ここで、分かって欲しいのは、ヤグーの尾は生涯に2度しか生えてこないことだ。
何故二度なのかの謎はいまだ解き明かされていない。

主に、人間にとって山中での非常食扱いを受ける彼らの肉は実に美味い。

よく締まっている肉は、鳥のささ身に似ているだろうか。

私のお勧めは、塩焼き、チーズ巻き、そして煮込みだ。
本来の旨みを引き出すため、余計な味付けは無いほうがいい。
うちの家内は料理があまり上手くないのだが、ヤグーの調理だけは天下一品だ。
これに惚れて結婚を決めたといっても過言じゃないかもしれない。
ちなみに、夫婦仲は円満で、今度の休みにはデートと称し観劇へ行く予定だ。

目下の悩みは来月迎える結婚２０周年記念のプレゼントは何が良いだろうか・・・ということに尽きる。あらゆる方面から現在検討中で、良いアイディアがあれば、ぜひ教えてもらいたい。

ん？そんなことは聞いてない・・・と。

こりゃ失敬。

ともかく、もしあなたが、山中で遭難し、そこでヤグーを見つけたとしたら幸運だ。
すかさず捕獲のための準備をし、つかまえ、非常食としよう。
一匹捕まえるだけで、成人一人の二日・・・いや節約すれば４日は持つ。

その間に、助かる道が模索できるだろう。

また、ヤグーの生息地では岩が多く見られ、運がよければ近辺で洞窟などの避難場所も見つかる。
一石二鳥だな。

ただ、これだけは注意して欲しいのは、ヤグーを捕獲するのに、決して『落とし穴』などという戦術を捕らないで欲しいということだ。
先程も述べたとおり、ヤグーは脚力に優れている。
小さな岩なら軽く飛び越えるだろう。
落とし穴を作り、それを軽々飛び越えた先に、もし諸君が隠れていたとしたら・・・・

爪に当たった君の身体は、全治２ヶ月の怪我を追うことだけは確実だ。

経験者の言うことは絶対に聞いておこう。

では、諸君の旅の安全を祈って。

サモエル・マチビアンコ・グエトロ

どこかの生物学者による解説（後書き）

異世界でのこぼれ話　？　母への手紙　～　薬について～

お母さんへ

そろそろ季節の変わり目となり、気温の変化も激しくなっている今日この頃、いかがお過ごしでしょうか。

この世界に何の因果か、来てしまってからはや四日。

今まで日本を愛し、温泉を愛し、いくら同年代の友だちから枯れているといわれようともまったりゆったりを愛していた私に、サバイバル満点のこの生活は正直言って、心の休まる暇がありません。

今でもこれが夢なんじゃないかと甘い期待をしている次第です。

たまに小説を読みながら、または読んですぐに寝たときに、今まで読んでいた小説の世界が、脳の記憶整理という夢のかけらも無い世界に繁栄される時、眼が覚める直前であれば、多少自分の願いが反映されるようには行きません。

何より、読んだことも見たことも無い出来事が万歳過ぎて、もう若

くない体はついていけそうに無いです。

軽く書いていますが、事態は深刻で、あなたの娘は今後どうなってしまうのか不安でいっぱいです。

もし夢なら、いつものように早く起こしてください。

今ならどんな起こし方をされても、感謝感激雨霰（かんしゃかんげきあめあられ）です。

食事もおごりますし、親孝行もいたします。

何なら、百歩譲ってお見合いだって致しましょう。

あくまで致すだけですが・・・・。

この世界・・・めんどくさいんで『ここ』と言わせてもらいますが、ここは信じられないことばかりです。

自分の世界を正しいと盲目的に思っているわけではありません。

ただ、薬に虫を使用するのだけはいただけないと思うのです。

マムシ酒、イナゴの佃煮等々、確かにそちらにも虫を利用したものはありました。

ですが、虫をすりつぶしたものをひとの傷口に塗るのだけはどうしても抵抗があるのです。
もちろん経口薬として飲むのもごめんこうむりたいです。

始めは薬になった後のものを渡されており気づかなかったのですが、けが人が増えていくにつれ、在庫が無くなったのでしょう。
今では材料のみ渡され、作成からすることもしばしば。

手に残った虫をつぶす感触が気持ち悪くて、鳥肌が今も立っています。
ゴキブリを見ては悲鳴をあげ、赤とんぼがいれば和んでいた日々が懐かしいです。
繰り返しますが、ここに来てから4日目です。

そもそも、虫は突然の出現に悲鳴は上げますが、決して嫌いではありません。
好きでもないですが、眺められるくらいには関心もあります。

積極的に係わろうとは思いませんが・・・・。

自分が使っている肩の傷への軟膏に虫が使用されていないことを祈るばかりです。
早く怪我が治りますように。

最後に、この文章だけ読むと誤解をされそうなので書きますが、薬のすべてが虫ではありません。

ほとんどは薬草でできているようですが、何しろ使用量が多い上に、補充もままならないということで手に入りやすい虫で代用しているとのことでした。

まあ、なんにせよ薬が手に入るだけでありがたいことですね。

比べて日本は本当に恵まれています！！

なんだか変な話に終始してしまいましたが、今回はこの辺にしておきます。

そろそろ殿下の天幕へ行く時間になってきましたので。

では、体をご自愛して、長生きされてください。

決して書けない闇
絶対に届か
を抱えつつある娘より。
ない手紙に希望を寄せて。

異世界でのこぼれ話　？　母への手紙　～　薬について～（後書き）

実際には書く余裕は無いので、時間が空いたときに、日本を偲ぶよすがとして、エミは呟きを手紙という形に言い直しているのだと思います。

誇りと引き換えに。

あの方の失ったものは、とてつもなく大きく、何にも変えられないものでした。

あの方の得たものは、途方も知れないほど尊く、何とも比べられないものでした。

例えあの方がそれを選んだのではないのだとしても。

あの方の人生に影を、心に傷を負わせたのだとしても。

初めてあの方に出会ったのは父に連れられたお茶会の席で。

9歳のわたくしは社交を知らず、ただうろたえ、固まり、泣き出しそうになっていました。

優しい父の声掛けも、仕立てたばかりの綺麗なドレスも、美味しそうに並べられたお菓子も、色とりどりの花々も、普段でしたら小躍りして喜んでいたそれらは、このときばかりはなんらわたくしの緊張をほぐす助けにならず。

準備期間もろくに設けられずに決められた日取りの茶会は、初対面の人々に立ち向かうだけの勇気も、気持ちを抑えて愛らしい子供の笑顔を作る狡猾さも奪い去り、頼りなのは手の平の中の父の裾だけ。茶会には大人だけでなく、子供達もいましたがわたくしほどに幼いものはおらず、近寄って声を掛ける事ことは出来ませんでした。誰か誘ってくれたら・・・・と思わないでもありませんでしたが、皆様が大人の世界に興奮し浮き足立っているようで同年代との交わりに忙しく、わたくしのような相手にならない幼子の懊悩に気づけるほどの余裕は持たないようでした。

いえ・・・きっと声を掛けてもらっても萎縮し、その手をとって共に楽しむと言うことは難しかったでしょう・・・・。
それほどにわたくしは子供であったのです。

茶会と言っても立食式のパーティーは、9歳の子供の目線からすれば見上げるばかり。
見えるものは足、足、足。
顔の見えない頭上で交わされる会話も、今までに無い多くの人の集まりも、わたくしには恐ろしいと思えるほどでした。

会が始まって1時間ほどでしょうか、わたくしはもうすっかり疲れきっていました。
見上げるばかりの首も、しがみついていた手のひらも、置いていかれないようについていった足も痛みを訴えだしていて、頭の中はぼんやりと濁り始めていたほど。

そんな折、小さな歓声が聞こえ、ざわめきが広がり拍手と共に人々の波が左右に避けていきました。

疲れていたわたくしの耳にも聞こえた歓声。

もちろんわたくしには何がなんだか分かるはずもなく・・・まあ、身長のこともあって全く何も見えてはいませんでしたけれど。
人々のざわめきの元が気にはなっていましたが、父の裾を手放して見に行くことは出来ません。
その当時は何故でしょう。
この手を離すことはとても怖いことだと思っていたのかもしれませんね。

影のある室内から、その方が庭園に出てきた時、日差しに照らされた金の髪が輝き、凛とした表情の美しさと相まって、
「・・・天使さま」
思わず呟いてしまいましたの。
まだ幼いわたくしには・・・いえ今のわたくしでさえ、この時のあの方を思い出せば同じ思いを抱いたでしょう。
それまで不安だった気持ちも霞んだ頭も、出そうになっていた涙もあの方を目に入れた瞬間消えてしまいました。
それが分かったのでしょう。父は笑って「あの方がアレクシエル皇子だよ、シエラレーネ。私達の宝、国の次代を担うべき素晴らしい方だ。お前も恥じない自分になりなさい。ほら顔をあげて」あの方が良く見える位置まで連れて行ってくださり。

あの方はこのとき御歳１２。
微かに浮かべた微笑に、周囲の誉め讃える声に謙遜し応える姿。
同じ年頃の少年達とは比べ物にならない落ち着いたまさに王族として相応しい佇まいでした。
あの方にも人として、１２歳の少年としての面がおありになったでしょうに、わたくしは全くそんなことも考えず、ただただ憧れたものでしたわ。

それは協会の壁画に描かれた天使さまを見るように。
幼子を抱いて我々を温かく見守る聖母さまを見上げるように。
生身の人としてではなく。

このときの国王様、王妃様と並んだ姿は誰の目から見ても理想の家族の姿そのものでした。
王族に理想の家族など不敬を問われそうですが、とてもお幸せそうに見えました。
あえて、不幸を探すのならば、他に兄弟もおらず、たった一人のお子様であったことでしょう。
他にご兄弟がいれば、この後のあの方の運命は大きく変わったに違いありません。
あんなことがあった後でも、支えあえたことでしょう。

詳細についてはここで語るのは差し控えさせていただきます。
きっと、いまこれを読まれているあなたは遠からずそれを知ることになるでしょうから。

わたくしは全てを知るわけではないのです。

あの方のことを語っていますけれど、わたくし個人としてこの時もこれ以後も、あの方と接したことは御座いません。
お顔を拝見するのも、遠くから数えられるほど。
ですからこの一回の邂逅が心に強く焼きつきました。

幼い頃の植え付けとは厄介なものですね。
ほら、よく言われているでしょう？
『三つ子の魂百まで』と。
わたくしの中のあの方はこれから１０年間変わらない崇拝と憧憬の対象でした。

あの方に人格があることなど、あの方の人生があることなど考えもしないことで・・・

それが間違いであると、あの方も一人の人間であると分かったときにはもう決断された後でございました。
わたくし達の生活も変わりましたが、あの方に比べればいかほどでしょう・・・・。
初めて拝見した１０年後に再びお姿を見かけたとき、わたくしはあの方の支払った、支払い続けている犠牲に気づかされたのです。

一介の貴族令嬢に過ぎないわたくしがあの方のために出来ることはないと言っても良いでしょう。
ですからわたくしは祈ります。
せめてあの方のこれからが明るいものでありますように。
あの方の唯一が見つかりますようにと。

どんな極寒でも、逆行でも。
それが一人でないことで救われることは多いでしょうから。

私が抱く我が子に思うように誇りと引き換えにしても良いと思える存在を。

誇りと引き換えに。（後書き）

あけましておめでとうございます。

遅くなりましたが、今年もよろしくお願いします。

小話からになりました。

かりんとう

２０１１年

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1980n/

異世界での平凡な小話集。。

2011年1月24日22時43分発行